1.国道沿いに店を構えるあべ農園の直売所。2.農園を引っ張る阿部真一さん。
3.直売所の隣の阿部家。階段を覆い尽くす花も直売所の名物だ。

「父ちゃん！今年も〝んまい〟スイカできたなや」「んだな、母ちゃん」「花もいっぱい咲いてきれいになったから、みーんな来てけらっしゃいな～」「待ってっぞー」。今から30年以上前、ラジオに流れたこの一本のCMは驚きと笑いを誘った。当時、一般の農家がCMを流すなど前代未聞だった。しかも全編ズーズー弁で農家の父ちゃんと母ちゃんの掛け合いだ。「父ちゃんの『んだな、母ちゃん』っていうセリフが、何回練習しても棒読みでね～」と阿部敬子さん（76）は当時を思い出してお腹を抱えて笑う。「なまったコマーシャルなんて初めてで、なぁんと人気あったんだ」と良一さん（74）も笑う。二人にカメラを向けると、敬子さんがサッと良一さんの腕に手を回した。顔を見合わせ、「わはは」とまた笑う。

父ちゃん、スイカを作る

山形県尾花沢市は夏スイカの生産量日本一を誇る。冬場は平地でも2m以上の積雪がある豪雪地帯であり、土に染み込んだ豊富な雪解け水がスイカのシャリ感を生み出す。盆地なので夏場は30度以上になるが、夜になると涼しい風が抜ける。この寒暖差がスイカを甘くする。まさにスイカ栽培にぴったりの土地なのだ。このスイカの名産地で、「あべ農園」はランドマーク的存在だ。国道沿いの直売所には巨大なスイカの模型が突き出し、屋根には「すいかやの母ちゃん」「あべ農園」という大きな看板が、そして隣接する家の前には見事な花の階段がある。あべ農園の歴史は、良一さんの父・庄吉さんから始まる。

戦後、厳しい食糧難を背景に国は未開墾地の開拓を奨励した。1945（昭和20）年、隣村から入植してきた庄吉さんは、クワとスコップだけで原野を切り拓いた。川が遠く、水を引く設備を整えるお金がなかったので畑で陸稲（おかぼ）やジャガイモを育てた。貧しい農家だった。長男の良一さんは中学校を卒業するとすぐに農家になり、両親を助けるために懸命に働いた。米価が高く田んぼがあれば安定した収入を得られる時代だったので、良一さんは稼いだお金で必死に田んぼを買い集めた。ようやく安心して生活できるようになった矢先、減反政策が始まった。「日本人の主食であるコメを減らそうなんてそんな馬鹿な話はない。すぐに解除になるはずだ」と高をくくっていたが、減反は年々厳しくなった。コメの代わりに良一さんが選んだのがスイカだった。地域には既にスイカを作っている人がおり、良一さんは彼の元へ通ってスイカ作りを学んだ。1973（昭和48）年、初めてできたスイカを市場で売ったが、冷夏で需要が落ち込んで相場が崩れた。途中で売るのを諦めて親戚や友人に配ったほどだった。不運にも翌年も天候に恵まれず、「去年の二の舞だ」と頭を抱えたところ、「私が売る」と言ったのが妻の敬子さんだった。

母ちゃん、スイカを売る

おしどり夫婦の阿部良一さんと敬子さん。子どもたちに「いっつも一緒にいて、飽きないの？」と聞かれたこともあると笑う。